

アーティスト・プロジェクト #2.09

江頭誠 ゆめみ ぼら 夢見る薔薇 ドリーミングローズ ~Dreaming Rose~

Artist Project #2.09 Makoto Egashira ~Dreaming Rose~

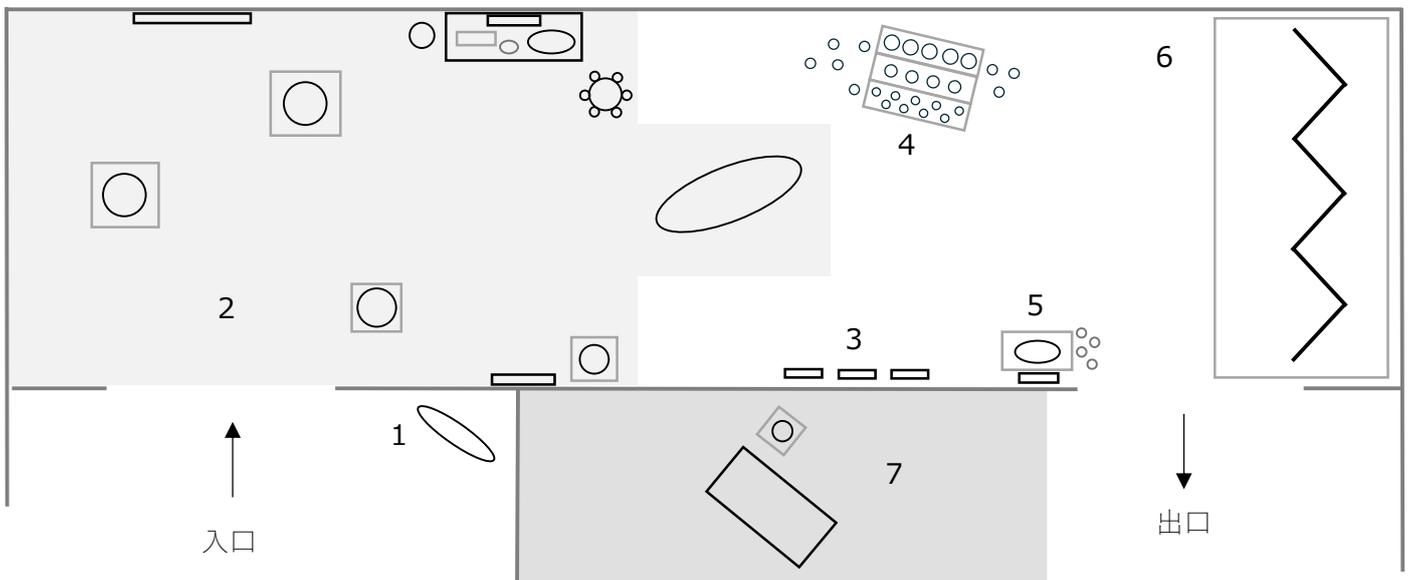
ご鑑賞にあたって

- ・全点撮影可能です。撮影した画像は私的利用の範囲内でご利用いただき、人物の写りこみ等にご配慮ください。
- ・フラッシュ撮影、三脚やセルカ棒の使用はご遠慮ください。
- ・作品や壁にはお手を触れないでください。

Request to visitors

- ・ Taking photos are permitted. Please respect work's copyright and visitors' portrait rights.
- ・ No flash, tripods or selfie sticks.
- ・ Please do not touch the exhibits, and walls.

出品作品一覧



※1階エントランス (no.8, 9)、1階ギャラリー(no. 11)、センターホール(no. 10)にも作品があります

- | | |
|------------------------------------|---|
| 1 花輪
2026 毛布、ミクストメディア | 8 わんちゃんたち
2026 インスタレーション
(1階エントランス横ウインドウ)
※美術館の外(正面口)からご覧いただけます。 |
| 2 ドリーム・序章
2026 毛布、ミクストメディア、ほか | 9 インスタレーション《SUIT》より
2017 毛布、ミクストメディア、ほか
(1階エントランス横スロープ下) |
| 3 精神コマンド石
2025 スタイロフォーム、大理石シート | 10 干された花柄毛布
2026 毛布
(1・2・3階センターホール) |
| 4 やわらかいピカピカ
2026 トロフィー、マットレス、毛布 | 11 梱包されたパイプ椅子
2026 毛布、パイプ椅子
(1階ギャラリー)
※本作品は実際に座って楽しんでいただけます。 |
| 5 脱いだあと
2026 肉襦袢、毛布、ミクストメディア | |
| 6 夢
2026 毛布、ミクストメディア | |
| 7 IN MY DREAM
2026 映像インスタレーション | |

江頭 誠 (えがしら まこと) プロフィール

1986年三重県出身。2011年に多摩美術大学美術学部彫刻学科を卒業。2015年、《神宮寺宮型八棟造》で「第18回岡本太郎現代芸術賞」特別賞を受賞。翌年、毛布で洋式トイレの個室を形作った《お花畑》で「SICF17」のグランプリを受賞する。近年は精力的に個展を開催するほか、BIWAKOビエンナーレなど芸術祭への参加、音楽アーティストYUKIのMV「My lovely ghost」やGUCCIのショートフィルム「Kaguya by Gucci」のアートワーク、アパレルブランドのショーウィンドウのデザインなど、幅広い活動を続けている。

Instagram



X (旧 twitter)



作家からのコメント

こんにちは。作家の江頭誠です。

私はこれまで、戦後日本の家庭で親しまれてきた「花柄の毛布」を主な素材として活動してきました。

私が毛布を使い始めたきっかけは、ある日、一人暮らしの部屋に遊びに来た友人に、実家から持ってきた花柄毛布を「ダサイ」と言われたことでした。それまで当たり前そこにあった毛布が、その一言で急に恥ずかしく、意識せざるを得ないものになったのです。特に好んで選んだわけではないのに、なぜあんなに派手な花柄が自分の視界に入っていなかったのか。そして、母が持たせてくれたその毛布を否定されたような、やり場のない気持ち。この経験が、私の制作の原点となりました。

本展「夢見る薔薇 ~Dreaming Rose~」では、私自身の「憧れ」や、自分を形作ってきた「理想像」、そしてその先に見つけた「自分なりの安心」についての物語を構成しています。

会場の始まりにあるのは、花柄毛布を纏った西洋彫刻です。

それは、かつての日本がどこかで遠い国への憧れを抱き、理想を求めているような……そんな時代の空気感だったのかもしれませんが。私自身も「強く、正しくあらねばならない」という感覚に、複雑な思いを抱くことがありました。石膏デッサンで間違いのないように描かなければいけないという、あの正解への息苦しさはどこか馴染めない自分もいました。私はそれらを毛布で包み込むことで、その硬さをほぐしたいと考えました。

続くトロフィーや、大理石風の素材に「努力」「根性」「忍耐」と刻まれた作品は、昭和の時代にお土産物として親しまれた石の置物のような、独特の重みを持っています。それらは一見、威厳があるように見えますが、実はとても軽い素材でできています。かつての栄光や積み上げられてきた価値観、自分を大きく見せるための「鎧(よろい)」のようなものを、軽やかに捉え直したいと考えました。こうした強さに憧れることは、自分を守り、安心感を得るための一つの形だったのかもしれませんが。

そして、毛布で作られた肉襦袢(にくじゅばん)の抜け殻。これは、それまで自分を包んでいた「強いイメージ」から、ふっと解き放たれる瞬間をイメージしています。

会場の奥に広がる屏風(びょうぶ)の作品は、私にとっての「パーソナルスペース」であり、同時に「隠れ家」でもあります。

屏風に空いた穴からは、花たちが切り取られています。その花たちは、入り口にある花輪や西洋彫刻、トロフィーや肉襦袢といった他の作品たちの中にも混ざり合っています。

毛布に描かれた花たちは、ただ可愛いだけではありません。それはまるで『不思議の国のアリス』に出てくる、こちらに話しかけてくる花たちのように、どこか不気味で、雄弁にこちらを見つめてくるような気配を纏っています。

私にとって、そんな生々しい気配を持つ温かな毛布にハサミを入れることには、いつも少しの罪悪感があります。だからこそ、この屏風は、これまで切り捨てていた残骸も合わせ、もう一度繋ぎ合わせるようにして再構成しました。

その茂みには、私がずっと一緒に暮らしたいと願っている動物たちが潜んでいます。私は、広く開放的な場所よりも、何かに囲まれた、少しごちゃごちゃした場所の方に安らぎを感じます。誰かの視線を気にせず、いつでも逃げ込めるような場所。大好きな水木しげる先生が描く深い森の気配や、黒澤明監督の映画『夢』にあるエピソードに想いを馳せながら、この場所を作りました。

出口の先に待っているのは、白いベッドで白い毛布に包まれて眠る少年です。

毛布には会場で見届けた花柄が投影され、枕元には粘土で作った犬が寄り添っています。

この展示すべてが、彼が見ていた夢だったのかもしれない。映画『くまのプーさん』のラストシーンのように、ふっと現実に戻るような、どこか不思議な感覚。

「憧れ」という名の夢から、自分自身がしっかりと落ち着ける場所へ。

最後になりますが、本展を開催するにあたり、多大なるご尽力をいただいた美術館スタッフの皆様。貴重な作品を快く貸し出してくださったホテル三日月の皆様。日々の活動を支えてくださる職場の皆様、そしてどんな時も傍で支えてくれた家族に、心より感謝を申し上げます。

そして何より、今日この場所を見に来てくださったあなたへ。

本当にありがとうございました。